

「空前絶後！」四国八十八ヶ所霊場出開帳

—スペクタクルとしての巡礼と巡礼空間の生産—

森 正人

【要旨】

本稿は一九三七年に大阪で南海電鉄会社が行った「四国八十八ヶ所霊場出開帳」に注目し、それがどのような社会的過程で生産されたのかを詳述する。これまでの四国遍路史上、たった一度だけ成功を収めたのが一九三七年の出開帳である。この出開帳は宗教団体が主催したものでも四国内で行われたわけでもなかったため、従来の研究ではほとんど取り上げられることはなかった。またこれは、鉄道・出版資本、国家政策、仏教寺院がそれぞれの思惑を交差させながら重層的に生産されたのである。したがって、この出開帳を取り上げることにより、四国遍路自体の複雑性を示すことができる。また従来の研究における静的な巡礼空間モデルに対して、巡礼空間が社会的構築物であること、さらに、生産された空間が社会的構成を行う社会—空間弁証法が見られることを示すこともできると考える。

1. はじめに

(1) 巡礼研究における四国八十八ヶ所霊場出開帳への視角

新世紀に入ってから、四国八十八ヶ所巡礼（以下、この巡礼現象の総体を「四国遍路」と略称する）をめぐって新たな動きが生じつつある。四国遍路の統一的組織である「四国八十八ヶ所霊場会」が、一九三七年に次ぎ二度目の四国八十八ヶ所全札所寺院の出開帳を企画し、現在はそのそれぞれの札所寺院の本尊を謹製するための費用を募っているのである。本稿が取り上げる「出開帳」^{でかいちよう}については、日本史を中心として、近

世の史料をもとに、江戸における出開帳の全般的な開催状況のほか（北村一九九三）、個別具体的な寺社の開催状況も明らかにされている（小林一九七九、湯浅一九八六ほか）。出開帳は寺社が持つ神仏を人々に開扉することにより、神仏と結縁することを目的とする宗教行事で、鎌倉時代には善光寺などで開帳が行われていたことが確認されている。とくに中世中期以降は開帳の参詣者もたらす金品の奉納などが寺社財政を支えるという側面があり、江戸時代になると幕府の寺社助成策のひとつとして、幕府の許可の下で一種の興行として大規模に催されたのであった（北村一九九三）。白木（一九九四）によると、全札所がそろって行われた出開帳の最古の例は、一七六四（明和元）年七月九日からの六〇日間、秩父三十四所が東京の音羽護国寺で行った出開帳であり、江戸時代には秩父以外の組織的な出開帳は見られなかったとされる。

実は、今回取り上げる一九三七年の「四国八十八ヶ所霊場出開帳」が、これまでの四国遍路史上で唯一成功を収めた宗教的なイベントである。これ以前にも以後にも成功することはなかったため、当時の広告文句そのままに、現在でも出開帳は「空前絶後」であるわけだ。従来の巡礼研究では、歴史学、宗教社会学、人類学、宗教学などが巡礼に関心を寄せ、四国遍路研究もそれなりに蓄積されてきた。とくに、人類学における巡礼研究においては、ターナーのコミュニタス論への反論や活発の議論が生じるなど理論構築が進んだが（Morinis 一九九二）、日本の民俗学は

むしろ個々の巡礼に関わる習俗、あるいは巡礼地の特性を記述することに力点をおき、四国遍路研究を進めてきたといえる。

筆者はこれまで、近現代における四国遍路が、単なる宗教現象ではなくて、同時代の観光や国家政策、マス・メディアなどどのように結び付きながら成立してきたことを明らかにしてきた（森二〇〇一、二〇〇二）。従来の四国遍路研究はこうした分析視角をとることはなく、また本稿で取り上げる四国八十八ヶ所霊場出開帳のような、四国外の大阪で、電鉄会社という宗教とはまったく関わりのない主体が開催したイベントにはほとんど関心を払わなかった。しかし、このイベントに注目し、巡礼の諸相を複眼的に捉えることは、右の分析視角では十分な意味を持つのである。

こうした研究態度は、文化や民俗とはいったいなにかという近年の問題構成と、ある側面で結びついている。たとえば、社会学者のギデンズ（一九九三）が提起する再帰性の考えに拠って立つと、それまで常民が無自覚・無批判につづけてきたといわれる、民俗学における民俗概念も再考が迫られる。民俗の担い手が、みずからの生活文化やその状況を意識し、その中で自らの「民俗」が取捨選択、維持され変容する様態を、八木（一九九四）は民俗の再帰的状况として論じたのである。また、ポスト・コロナリアルの問題関心においては、文化における政治権力とそこにおける人々の抵抗実践も注目されるようになっていく。ただし、さらに資本主義への批判的想像力が必要とされる。なぜなら、社会的全体性の重層的決定において経済が最終審級であるとして、運動体である社会においては、つねに最終審級はなされないものであるから、文化・経済・政治の重層性が問われるべきである（アルチュセールほか一九九六）。そして、こうしたある種の脱構築の作業を巡礼研究にも応用することは、

さらに求められるはずである。

（2）巡礼空間の諸問題

巡礼は巡礼者があるルートを移動する空間的な現象であるといえる。そしてこれまで、巡礼がどのような空間的な発現をするのかということにより、二つのモデルが提示されてきた。四国遍路や西国三十三か所巡礼のように複数の聖地を持ちそれが円周状になっているという「円周型巡礼」モデルと、メッカ巡礼や伊勢参詣などのように主たる目標が一か所に限られる「単一聖地型巡礼」モデルである（真野一九八〇、星野一九八一）。この議論は近年、巡礼者の具体的な行動パターンを考慮することで再考されることとなった。浅川（二〇〇一）は歴史的に重要な史料を用いることによって、従来四国遍路が単なる「円周型巡礼」などではなく、巡礼者たちは行乞のために巡礼ルートを外れていることを確認し、これを「乞食圏」と命名することにより「数珠状の巡礼空間」を設定できると、冗長に述べている。

しかし、浅川の巡礼モデルの提示はいくつか重要な問題をはらんでいる。そもそも、そこで示される巡礼のルートは一体だれによって比定されたもので、いつの時代のものなのか―浅川が地図でどれほど巡礼ルートから外れているのかを示すとき、その巡礼ルートとはいつ時代のもので、誰が特定したものなのだろう―、またそもそもそうした巡礼ルートを「外れる」という考え方自体を当時の巡礼者が持っていたのか、つまり巡礼者は巡礼ルートを守らなければならないと考えていたのか、ということについての検討がすっぱりと抜け落ちている。筆者がかつて示したように（森二〇〇二）、巡礼ルートや移動手段は巡礼者にとって絶対的なものではなかったはずである。もし、巡礼者がルートから外れたか

ら、巡礼者にとって巡礼ルートは絶対的なものではないのだというのであれば、それは議論自体が倒立している。

さらに、この巡礼空間モデルでは社会的構築物としての巡礼空間という視角をとることがなかった。巡礼空間モデルを設定しようと、あるいはそれに当てはまらない行動パターンから新たなモデルを提示しようと、結局は従前のモデル策定の議論に賛成するか否かの二分法に落ち着くことになってしまう。しかし、筆者はすでにルフェーブル(二〇〇〇)によって提示された「空間の生産」概念を援用しながら、巡礼空間がどのように生産されるのか、そのなかで巡礼者たちはどのような実践を行ったのか検討している。巡礼が行われる空間がどのような社会的文脈において継続的に生産されるのか、すなわち権力による戦略と、その下で生きる人々の戦術によりどのように絶えず空間は再・生産されるのか、ということが重要なのである。

ルフェーブルの生産概念を引き継ぎながら、ソジャ(二〇〇三)は、社会が空間を生産するだけでなく、空間が社会を生産する「社会—空間弁証法」を提示している。本稿では、四国外に生産された「四国八十八ヶ所霊場出開帳」をも四国遍路全体の一部と捉え、その巡礼空間の生産過程に注目することにより、第二次世界大戦前の四国遍路が、総体としてどのように生産されていったのかということを示すことができる。と考える。というのは、本稿で示すように四国八十八ヶ所霊場出開帳を通して、四国遍路の統一的な組織が形成されていったと考えるからである。四国遍路における社会—空間弁証法を最後に提示してみたい。

四国八十八ヶ所霊場出開帳は社会的に生産される過程で、宗教的な文脈から引き剥がされ、資本にからめとられ商品化されていくこととなる。人びとは物象化された四国遍路と向き合わざるをえない「スペクタクル」

を経験することになった(ドゥボール二〇〇三)。しかし、ルフェーブルの空間の生産概念においては人々によって生きられる空間である「表象の空間」も空間を生産する契機となるはずであるし、ドゥボールもまたスペクタクルを示すことで、スペクタクルを転倒させるための「状況の構築」をめざしていたはずである。ここではこのスペクタクルの中で生きざるをえない人びとが、どのような実践を行っていたのかということもできる限り取り上げていきたい。

筆者は、巡礼研究家の白木利幸氏が所有する『四国八十八ヶ所霊場出開帳誌』(本文では「出開帳誌」と示す)と、大阪市東住吉区の法楽寺が所蔵する出開帳の葉を拝見することができた。この資料はこれまで誰も用いたことがないことから、資料的な価値を持ち、これに新聞資料等を加えて分析したい。ただし、これら以外の資料はほとんど存在せず、いわば特定の権力によって編まれたテクストを間テクスト的に読み取る方法もまた限定されていることをあらかじめ断っておきたい。

2. 南海電鉄会社開業五十周年事業と四国遍路

(1) 出開帳開催と乗り越えるべき壁

一八八五年、難波から大和川までの七・六キロを結ぶ「阪堺鉄道」が開業した。この会社は一八九三年に大阪と和歌山を結ぶ「紀阪鉄道」と合併し、南海電鉄会社が新たに設立された。一九三五年は阪堺鉄道の開業から五〇周年の記念すべき年となり、記念式典を翌年に行う予定であったが、二・二六事件勃発のため、記念式典は取りやめとなった。ただし記念事業として、住吉神社と高野山根本大塔への灯籠の献納、社史『開通五拾年』『南海鉄道発達史』の刊行、さらに国民の体位向上のため、

高野線・中百舌鳥の社有地に一八万平方メートルの総合運動場を建設した（小林一九三八、南海電気鉄道会社編一九八五）。この記念事業の中に四国八十八ヶ所の出開帳も取り入れられるのは、表1にあるように一九三五年十二月のことであった。南海鉄道関係者らが四国に出張した時、四国八十八ヶ所の第十九番札所の住職庄野琳真と列車内で遭遇し、出開帳のことが話題となったとされる。

一九三〇年代を通して巡礼は観光の一形態として捉られていき、四国八十八ヶ所においても簡便な交通手段を用いて「合理的」に巡礼を行う人々が現れていたが（森二〇〇二）、すでに、一九〇五年には西国巡礼を新聞記者二人のどちらが先に巡礼し終えるかを読者に予想させる「十三所巡礼競争」、一九〇八年には四国遍路を二人の記者が実践し、それに要する日数を読者に予想させるという企画を大阪毎日新聞（以下、「毎日新聞」と略称）が行うなど、メディア・イベントの中で巡礼は示差的に消費されていた。このようなメディアとの関係はやはり一九二〇年代から三〇年代にかけて強くなるのであり、例えば、一九三七年の新聞には、「春かすむ西国霊場へ 背広巡礼唄」というタイトルで、「春ですね、お彼岸ですね、サソ旅はい、でせう、どこへ行くこうかな、宗教ハイキングはどうです、宗教ハイク？イヤ西国巡礼のことですよ」（大阪毎日新聞一九三七年三月二十一日付）と、宗教的な文脈とは異なる宗教ハイキングとしての西国巡礼の捉え方を新聞は紹介している。巡礼とハイキングとをマス・メディアが文字通り媒介する諸相は、同時代の雑誌などでも見られた（森二〇〇二）。

マス・メディアだけが巡礼に注目したのではない。一九三五年には阪急電鉄が沿線にある西国三十三ヶ所巡礼の寺院で出開帳を企画し、「曾根菽の寺、蛸が池圓福寺、みのを西江寺、瀧安寺、中山寺、宝塚聖天の

表1 出開帳開催までの経過

| 年 | 月 | 項目 |
|------|----|--|
| 1935 | 12 | 南海電鉄社長および社員が四国に出張し、第十九番立江寺の住職庄野琳真と出会う |
| | 2 | 南海電鉄会社3名が愛媛県香園寺住職を訪問し交渉開始 |
| 1936 | 5 | 計画案・申請書を88寺院宛てに送付、委員の選出 |
| | 6 | 遂行案(21条から成る)を各寺院に発送(南海電鉄会社側の予算案も決定) |
| | 7 | 香川県高松市にて四国各寺院の関係者が会合 |
| | 8 | 委員が大阪で遠州園と金剛園を踏査、本契約(31条から成る)を締結 「四国八十八ヶ所霊場出開帳奉賛会」(本部:了徳院内、事務所:南海ビルディング)結成、大阪毎日新聞社の後援決定 |
| | 11 | 南海本社で抽選し、徳島・高知県の39霊場を遠州園、愛媛・香川を高野線候補地に配施することが決定 |
| 1937 | 1 | 大阪毎日新聞に広告掲載、奉賛会会員の募集 |
| | 3 | 四国各県における行政による出開帳の認可終了 大阪府へ「出開帳開筵許可願」、認可、着工 |
| | 5 | 5/2に両会場が完成、大阪府建築家、社寺課、保安課の検査 各寺院住職が本尊の分像を持って来阪、4日に北区太融寺にて入仏法要 |

資料：吉田（1938）

表2 南海電鉄の出開帳予算

| 内 訳 | 金額 (円) |
|------------|---------|
| 本尊分像謹製費 | 17,600 |
| 御寺院出張費 | 13,200 |
| 法要費 (3 回分) | 6,000 |
| 設備費 | 17,000 |
| 宣伝その他雑費 | 50,000 |
| 総額 | 104,400 |

資料：吉田 (1938)

注) 資料に記された各項目の金額と総額との間には 600 円の誤差がある。

六ヶ寺で奉修され」(「六大新報」第一六一二号、一九三五年、一四頁)。
 た。詳細はまだ不明だが、三十三日間で四〇万人以上が訪れたとされる。
 この西国巡礼の出開帳の成功が、四国八十八ヶ所の出開帳の開催へと向
 かわせることとなり、四国八十八ヶ所の札所寺院関係者たちは成功への
 大きな自信を持つことになった。

実は、四国八十八ヶ所の出開帳はその時点までに何回か試みられてい
 た。まだ新聞資料なども見つからないのだが、一九二九年に岐阜県
 大垣市で開催された四国八十八ヶ所の出開帳は「不幸な状態」として、
 以下のように紹介されている。

当時伊予部会は霊場神聖保持の爲め「出開帳すべからず」と強硬に主張
 し、知事の勧誘をも退け、他三国の強要にも屈せず、遂に六十二箇寺の
 出開帳となつたが、其の出開帳も中途に於て、不幸閉鎖の止むなきに至
 つたと伝えられてゐる。また大阪の某郊外電鉄に於ても万全の計画の下
 に実行に取り懸かつたが、是亦遂に阿波、土佐の両国霊場のみのこと、
 なり、伊予、讃岐の霊場は出開帳に應ずるに至らなかつたと云はれてゐ

る (吉田 一九三八、三頁)

これまで全札所寺院による四国八十八ヶ所出開帳は一度も成功したこと
 が無かつたことが、出開帳誌では強調されている (大阪の某郊外電鉄と
 は「大阪電気軌道」(現近畿日本鉄道株式会社)であるが、これに関す
 る資料もまだ見つかつていない)。こうした経緯のため、徳島県の汽車
 の中で南海関係者から相談を受けた立江寺の住職は、出開帳の開催は困
 難であることを伝えたのだった。

出開帳誌では、それまで出開帳が成功しなかつた要因が三点挙げられ
 ている。宗教的な信念から商業的・興業的な出開帳の反対を主張する寺
 院住職が多かつたこと、これらの意見調整を行う四国通路全体を統制す
 る組織がないこと、さらに各寺院の財政的な格差が大ききことである。
 後述するように、すでに「四国霊場会」が作られていたようだが、四国
 通路の札所寺院全部の意見を調整する機能は持っていなかつたようであ
 る。したがって、このような機能を欠いた四国通路の出開帳は成功する
 ことはなかつたのだと考えられる。

一九三六年二月中旬から、南海関係者による出開帳開催に反対する人々
 への説得が、四国の札所寺院のほか、大阪府内の真言宗寺院の住職の仲
 立ちをえて行われた。反対する住職は「四国霊場の有難味は、其の霊地
 霊趾と結び付きたる本尊にあるのであつた、単に本尊のみを移動するは
 意味をなすものに非ず」(吉田 一九三八、四頁)といふことだったので、
 新たに八十八個の仏像を作成し、四国より各霊場住職給出で盛大な開眼
 供養を営むという妥協案が作られた。また、かつての出開帳で経済的な
 問題を抱えてしまい、仏像を入質して帰途の旅費に充てるという札所寺
 院も存在あつたといわれるが、このような経済的な問題に対して南海が

援助の約束をした。こうした反対派の説得が奏功し、開催への目処が立つこととなった。

(2) 競合する聖地と合意へのプロセス

一九三六年五月初旬に南海側は計画案・申請書を作った。四国八十八ヶ所御本尊分霊の下付を願うこと、下付された本尊の分像は南海が謹製し、一旦各霊場に奉納開眼供養をしてもらうこと、分像を出開帳会場に奉納する前に、四国霊場連合会主催で南海の選定する場所で大開扉し、大衆に結願させること、などがここでは提示された。また四国の札所寺院の方は、各県の札所寺院六ヶ寺で構成される委員会を設置した。さらに、その下部に実行機関として理事を決定した。徳島・愛媛・高知県からは各三ヶ寺、香川県は八十七番長尾寺を四国側の事務所としたため、それを合せて四ヶ寺の住職が理事会理事に選出されている。

こうしておそらく初めて四国四県の札所寺院がひとつの目標に向かつていく中、三十番札所の善楽寺の問題が顕在化した。善楽寺は廃仏毀釈の影響を受け一八七一年に本尊・大師尊像などを二十九番国分寺へと移し、納経もそこで行っていた。その後、仏像と納経を高知県の安楽寺に移し、そこが三十番となっていたが、一九二九年に善楽寺が再度大師像を返却してもらい再興することとなったのである。この一九三六年時点では三十番札所は安楽寺とみなされており、高知県部会で安楽寺住職が出開帳委員として選任され、四国全体の運動へと移行していたころに、善楽寺の住職が異議を申し立てたということであった。南海側は巡礼者がどちらの寺院を札所と見なしているのか調査し、関係寺院への事情聴取を行った。その結果、これまで安楽寺を三十番札所として計画を進めてきたこと、巡礼者は双方を巡拝しており、どちらかでなければならな

いというわけではないということを踏まえ、当初の決定どおり安楽寺住職を委員とすることにした。なお現在の三十番札所は安楽寺ではなくて善楽寺である。

余談となるが三十番札所の問題が生じた一年後に、善楽寺住職の山本成之は高知県の郷土誌『土佐伝説』に文章をよせている。内容は、善楽寺が正統な札所寺院であること、再興に多大な努力をしたことなどを訴えるものであり、書かれた時期を考えると、この出開帳から善楽寺が除かれてしまったことに対するものと思われる（山本一九三七）。

さて、こうしたいくつかの問題を解決しながら、南海側は出開帳の遂行案を四国八十八ヶ所側に提示するに至った。この遂行案では、どこで出開帳を行うかということはまだ決まっていなかったが、一日から二日間で巡礼可能な場所を出開帳会場とすることが望ましいこと、出開帳中には巡礼者への接待を寺院側が行うことなどが提案された。また、表2に示したように予算も決定された。後述するが、宣伝費にもっとも多くの予算が組まれており、新聞紙上などで宣伝が行われたのである。次に多く述べたように、札所寺院側が本尊供出に難色を示したことから、札所寺院間の経済格差を勘案して、南海側が負担するものである。その下の「御寺院出張費」も南海側が負担するが、会期中の滞在費・諸経費の他、仮の本尊に対する会期中の各寺院の奉仕は各々が負担するものである。ちなみにこの時点で南海は、この出開帳には十万人以上が来訪すると試算している。

札所寺院側は一九三六年七月に各県別に寺院住職会を開催した（表1参照）。高松市で開催された香川県の札所寺院の会では「従来の分身仏開眼供養案は不徹底でなれば大小の異論はサラリと水に流し、寧ろ空前

の八十八ヶ寺絵出開帳とすべしとの意見が出て、満場一致これに賛同の意を表した」(吉田 一九三八、六頁)のであった。こうして各県ごとの部会において初めて出開帳に対して八十八の札所寺院の合意が形成され、おそらく初めて全札所が合同で事業を執り行うこととなったのであった。

3. 「四国八十八ヶ所霊場出開帳奉賛会」の活動

(1) どこを会場とするか

一九三六年八月に「四国八十八ヶ所霊場出開帳奉賛会」が結成された。本部は大阪市西淀川区浦江町了徳院内、事務所は大阪市難波の南海ビル内とした。一九三六年時点ではすでに満州事変が起こり、いわゆる総力戦体制へと日本が向かっていた。したがってそのような社会状況においては、出開帳を開催するためのいわばお題目が必要となるのであり、会結成に際して作成された設立趣意書を見ると、出開帳の目的は三つ挙げられている(吉田 一九三八、三九頁)。まず出開帳が「皇道精神ノ発揚」「思想善導」に資すること、これは「非常時」における語りのスタイルであった。第二には、「鎮護国家万民快樂の祈願」、そして第三には一九三四年に近畿地方を襲った風水害の三周年に被災者を慰霊することであった。

出開帳の会場として、浜寺公園、大浜海岸、中百舌鳥、狭山の四ヶ所が候補地とされた。この会場に四国四県別に霊像を奉安設置する予定であった。橋爪(一九九二)によると、一八九七年に南海浜寺公園駅が作られ、南海の資本開発により一九〇五年に大衆向けの浜寺海水浴場が設置されるなど、浜寺や大浜は南海が創り出した海浜リゾート地であり、この場所を利用しようとしたのである。しかし理由は不明だが浜寺公

園と大浜海岸を会場にすることができなくなり、一九三六年八月に再度、南海本線の助松遠州園と高野線河内半田、瀧谷両駅間の寺ヶ池の「踏査研究」が行われ、ここを会場にすることが決められた(図1)。これらの会場は一日ないし二日で廻ることが可能である場であることが選定の条件とされていた。二会場が別の場所であるだけでなく、図1にあるように別の路線であるため、出開帳参加者は南海電車を利用せねばならず、二会場を訪れるには浜寺でバスに乗り換えるか、一度大阪方面へと引き返して乗り換えねばならなかった。十一月中旬、抽選により徳島・高知県の三十九寺院が遠州園、愛媛・香川の四十九寺院がもうひとつ候補地となった。

このもうひとつの候補地が金剛園であり、金剛駅が出開帳に際して作られた。出開帳に際して作成された葉には、建築物の全くない荒涼とした平原の金剛園の写真があり、この地が出開帳に際して開発されたことが分かる。この金剛駅は現在、大阪府大阪狭山市の主要駅として、毎朝夕、多くの通勤・通学者を送り出し、迎えている。遠州園があった南海助松駅周辺は、現在は泉大津市となっており、駅名は北助松駅となっている。遠州園が置かれた砂浜は、戦後の高度経済成長期に工業地帯へと変貌している。

また葉によると遠州園については「白砂青松、風光絶佳、オゾンに富み、金剛園については「寺池の畔風光明媚な丘上」と、それぞれの景観を表象している。このように自然の風景美による場所の表象、さらには健康のイメージによる場所の価値付けは、近代以降の風景の生産や都市に住む新中間層向けの郊外住宅地の商品化において盛んに見られるものである(片木・藤谷・角野編二〇〇〇)。とくに「衛生」という観念が明治時代に日本に流入すると、衛生という観念はある種の流行となっ

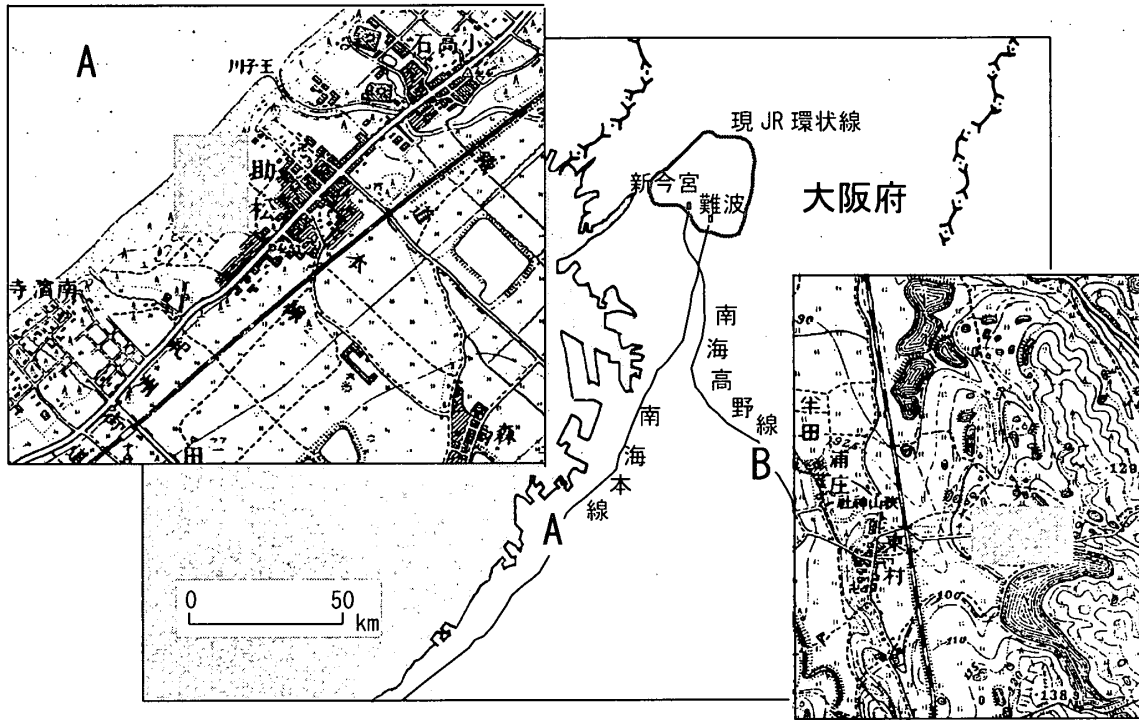


図1 出開帳会場

注 網掛け部分が出開帳会場である。またAは1929年、Bは1932年修正測量の地形図を用いた。
 なお、鉄道の路線は現在のものを示している。

ていたが（小野一九九七）、衛生に関わるシニフィアンがシニフィエたる場所と結びつけられ、不動産という物質的な財へと転化するわけである。

両会場では、四国八十八ヶ所の巡礼ルートのように円環で各札所の堂が設置された。ただし、これは従来の巡礼研究が力説してきたような、四国遍路の持つ円周的な巡礼空間が映し出されたというよりも、会場でいかに参拝者が効率的に各寺院をめぐることができるのかということに配慮した配置であると考えの方が妥当だろう。また実際の札所間の距離などが、会場での各場所の配置に反映されているのではない。

全札所の安置所が完成するのは、出開帳開催の直前である（表1参照）。安置所は木造平家建屋根柿板葺または檜皮葺で、各安置所は本殿、宿直室、納経所から構成されている。本殿内部には、御供物台、前机、密壇、霊盤、脇机、賽銭箱、唐幡、幔幕、打鳴が設置されたのであった。また公衆便所が遠州園には一ヶ所、金剛園には三ヶ所設置された。

（2）宣伝される四国八十八ヶ所出開帳

奉賛会はポスターや数種のリーフレットを作成し真言宗各寺院に送付し、街頭に掲示した。またこの出開帳を真言宗機関誌の『六大新報』の他、協賛の毎日新聞紙上を通して宣伝していった。出開帳誌によるとこのほか、『大阪朝日新聞』や『夕刊大阪』・『大阪日々』などの媒体にも宣伝を掲載したとあり、表3に示したように大阪毎日新聞には一四回、大阪朝日新聞には一三回広告を掲載している。ここからは、その理由は明らかではないが主に夕刊に広告が掲載されたこと、同じ日に掲載されたのは六日と二つの新聞紙で重複が避けられていること、さらに表4と比べてみると『大阪毎日新聞』に記事が掲載された日は同紙には広告が

あまり掲載されていないことが分かるのである。

大阪毎日新聞は出開帳の模様を表4にあるような記事で伝えていった。出開帳誌では毎日新聞に初めて広告を掲載したのは一月十七日付であるとしているが、確認したところ、それは四月十七日付の誤りであることが分かった。また大々的な新聞広告を行った日にちも誤りで、表3にある四月二十三日であることが判明した。

四月二十三日の広告のタイトルは「空前絶後!」とあり、続いて

霊場八十八ヶ所一ヶ所も欠けずに出開帳せられることは『今までには絶対ありませんでした』し『これからも恐らくは出来まいと思はれます』全く千載一遇と云ふ言葉通りの大盛儀で此の機を逃しては又と再び得られぬこと、存じます

と、この出開帳がいかに重要な行事であるかが示されている。もちろん、四国八十八ヶ所についての知識がない都市居住者も新聞読者であるため、記事にはまず四国遍路の概要が書かれ、後半部で四国遍路が人間育成に役立つこと、さらに四国遍路が国威発揚の祈禱の機会であること、身体の育成に資することが示されている。

都会の生活で疲れ果てた人間の頭脳は、先に述べたように「自然」が健康にするのであり、そうした観念において、四国遍路が都市居住者の頭脳を「清浄」とするという主張は、宗教的な団体においてなされたし、また国内旅行の旅行情報誌『旅』においても「都会人近代人の誰もががかかつてる神経衰弱などは遍路に依つて直せさうに私は思つてゐる」(下村 一九三七、八頁)とある。したがって、新聞広告で出開帳が人間育成や身体育成に役立つことを主張していることは決して特異なことではなく、同時代的な

言説なのだった。「殊に生存競争に疲れたる都会人に、手取早く、宗教的情味を喫せしむるには、最も適切なる催しだと存じます」(吉田 一九三八、八〇頁)という語りは出開帳誌に寄せられた関係者の所感である。

また奉賛会は、新聞や真言宗の機関誌を通して、奉賛会の会員を募った。奉賛会会員応募の締め切りは出開帳開催前の四日前であり、入会者には会員証を交付した。一九三七年の真言宗機関誌『六大新報』(一七一五号)での大々的な広告から、奉賛会員の特典を挙げてみよう。奉賛会員になると、札所住職自筆印刷の納経帳、大阪府内あるいは和歌山県下のいくつかの駅と出開帳会場を往復する巡拝乗車券、御納経割引券、そして会員各家先祖の御回向のための御回向券を入手することができた。会員それぞれの居住地や最寄り駅が異なるため、列車の乗車料金も異なる。そのため、会員の居住地により、奉賛会入会費はいくつかに分類された。最も安いのは堺市内に住む会員で一円、高いのは和歌山市内在住の会員で二円三〇銭となっている。一九三七年の公務員初任給が七五円であったことを考えると、後者の値段は現在の感覚では五千円ほどとなる(週刊朝日 一九八七)。

ただし、「霊場の総出開帳は空前絶後の壮挙であるといはれ、四国の元地で巡拝するときには総里程三百六十余里、徒歩で五、六十日を要するのが、出開帳では僅か一日で廻れ各寺の宝印が集められるといふので、京阪神はもとより土佐方面からの団参申し込みが殺到し出開帳奉賛会事務所ではその受付けに忙殺されてゐるといふ」(大阪毎日新聞 一九三七年四月十七日付)というように、出開帳開催前から、近畿圏以外の諸地域から大きな反響が寄せられていたことも事実であった。

表4 大阪毎日新聞に掲載された記事のタイトルと掲載月日

| 掲載月日 | タイトル |
|----------|--------------------|
| 3・18 (朝) | 四国八十八ヶ所が南海沿線に出開帳 |
| 4・17 (朝) | 四国八十八ヶ所霊場が一日で廻れる |
| 5・4 (朝) | 四国霊場出開帳けふ大練供養 |
| 5・5 (朝) | 四国八十八ヶ所御堂筋大練行 |
| 5・5 (夕) | 護国祈願烈士慰霊大奉養 |
| 5・6 (朝) | 楽なお遍路! |
| 5・6 (夕) | 四国霊場出開帳開く |
| 5・7 (夕) | 清浦伯夫妻四国八十八ヶ所出開帳を巡拝 |
| 6・2 (夕) | 献花式 四国霊場出開帳 |
| 6・14 (朝) | 出開帳霊場で甘茶の接待 |
| 6・15 (朝) | 出開帳の参拝者十五万 |

表3 大阪毎日新聞と大阪朝日新聞に広告が掲載された月日

| | 大阪毎日 | 大阪朝日 |
|----|----------|----------|
| 4月 | 4・17 (夕) | |
| | 4・23 (朝) | |
| 5月 | 5・4 (夕) | 5・4 (夕) |
| | 5・8 (夕) | 5・5 (夕) |
| | 5・9 (夕) | 5・7 (夕) |
| | 5・14 (夕) | 5・9 (夕) |
| | 5・20 (夕) | 5・14 (夕) |
| | 5・21 (夕) | 5・15 (夕) |
| | 5・23 (夕) | 5・19 (夕) |
| | 5・29 (夕) | 5・21 (夕) |
| | 5・30 (朝) | 5・22 (夕) |
| | | |
| 6月 | 6・5 (夕) | 6・6 (夕) |
| | 6・10 (夕) | 6・11 (夕) |
| | 6・11 (夕) | 6・12 (夕) |
| 計 | 14 | 13 |

注：網かけ部分は両紙ともに広告が掲載された日を示す。

4. スペクタクルと宗教性のはざま

(1) スペクタクルに乗って

大阪毎日新聞には南海電鉄側の発表として、終了二日前までの時点で出開帳を訪れたのは一五万人、出開帳誌によると、両会場とも各二〇万人の参拝者があったとされ、相当数の参拝者があったと思われる。金剛園の北方にある半田駅での一九一七年の一日平均乗降客数が九四名であったことを勘案すると、南海はかなりの収益を得たといえるだろう。

出開帳誌にはこの出開帳中に開催された座談会でのやりとりが収められている。この場で時事新報社の記者が「らかな気持ちの四国遍路」[観光的気分又は新婚旅行としての四国遍路]を提唱したところ、五十二番札所大山寺の住職や大阪市北区太融寺住職が「交々苦難と信仰との密接なる関係を力説」してこれに反対するなど、宗教関係者を中心に、この出開帳の宗教的意義を強調していたようである(吉田 一九三八、六二―六三頁)。しかし実状はどうだったのだろうか。期間中の動向を追ってみよう。

出開帳開催のため、各寺院の仏体は四日に大阪に搬入された。八十八の仏体は大阪市北区の太融寺へと移され、八十八ヶ所住職総出仕して国難打開の祈祷、戦病死者ならびに関西風水害遭難者慰霊祭を執行了。これらが出開帳開催の大儀であった。またすでに述べたように、一九三六年五月の南海側からの計画案においては、出開帳に先立って別の場所で大衆に大開扉し結願させることが提示されていたため、太融寺での儀式の後に御堂筋の南御堂に移された仏体は、さらにそこから南海難波駅まで大練行をすることになった。この様子については次のように報道された。

同勢千数百名、山伏の吹く法螺貝の音も物々しく毛鎗擔いだ奴行列は昔ながらの妙技を見せ、童児、童女の稚児行列もほ、美ましく八十八ヶ所霊場の御本体は金襴の帛に包まれて五体づつ、一昇の手輿に分乗、それぞれ住職に前後を守られて静々と練り出したが、十八台の手輿は坦々たる大路に縦列を作り沿道を黒山に埋める拝観者は南無大師遍照金剛の称名で送った（「大阪毎日新聞」一九三七年五月五日付）

都市において山伏の法螺貝や金の衣に包まれた手輿などの非日常的な光景を現出させ、多くの人々がそれを見物していたことが読みとれる。しかもこの非日常的な祝祭性は鉄道会社という資本家により演出されたものだった。難波駅から仏像は特別電車で各会場に搬送された。

表5の一番上の「弘法大師の夕」という講演は行進後に行われたものである。表では五日からいくつかの宗教行事が行われている一方、およそ巡礼とは関わりのない行事も見られる。「モダン巡礼競争」というのは東宝の前進である映画配給会社のJ.Oが、自ら制作した映画『宮本武蔵』の宣伝のため行ったものである。この年、J.Oと同じく映画配給会社の日活はともに同時期に宮本武蔵の映画を作り、競争して視聴者の獲得を試みたのである。J.Oの映画俳優であり宮本武蔵を演じた黒川彌太郎と五條貴子が武蔵組、佐々木小次郎を演じた澤村昌之助と鈴村京子が小次郎組に別れ、難波駅からそれをスタートし、出開帳二会場でスタンプレリーの競争をした。一般参拝者は勝敗を予想し、商品が贈呈された。この競争では、三時間四〇分で小次郎組が勝利を収めた。この他にも、キャバレーの踊り子たちによる「麗人モダン巡礼」が行われている。

また、表3を再度確認したい。表の五月九日のか所に二重線を入れている。五月八日までの広告では例えば図2の左のような出開帳のマーク

表5 出開帳期間中に行われた行事およびイベント

| 行事名 | 期日 | 内 容 | 行事名 | 期日 | 内 容 |
|---------------|--------------|--|-----------|---------|---|
| 弘法大師の夕 | 5/4 | 講演会、映画上映 | 献花式 | 6/3・6/4 | 大覚寺派の献花式を遠州園・金剛園にて開催 |
| 入仏法要 | 5/5 | 200名が参席して法要 | 中宮門跡の参拝 | 6/3 | 中宮寺新門跡が会員約200名とともに参拝 |
| 金剛流詠歌大会 | 5/12 6/10 | 5/12は遠州園、6/10は金剛園にて開催 | 大阪学童代表参拝 | 6/5 | 大阪市の学校体育教会が市内小学校から児童1名を選出し参拝 |
| 近畿風水害3周年記念大法要 | 5/19 | 両会場で開催 | 麗人モダン巡礼 | 6/15 | 大阪の「キャバレー大市」乙女ダンス約50名が「モダン巡礼オンパレード」を実施 |
| 風水害殉難舎慰霊墓前夜 | 5/20 | 堺市主催、殉難者500名産列 | 役員感謝の巡礼 | 不明 | 出開帳の成功に感謝し、奉賛会役員を含め総勢数百名が白衣を着て両会場の88ヶ所を参拝 |
| モダン巡礼競走 | 5/30 | J・O映画『宮本武蔵』完成記念。映画俳優が難波駅を出発し、両会場の巡拝時間を競う | 南海従業員代表参拝 | 不明 | 南海鉄道従業員約500名が出開帳の成功に感謝して参拝 |
| 霊場大座談会 | 5/29 | 大阪市西淀川区浦江聖天にて討論 | 結願法要 | 5/16 | 両会場で拡充食による読経回向 |
| 大覚寺派詠歌大会 | 6/3 | 遠州園にて嵯峨大覚寺派の詠歌大会開催。参加者70名 | | | |

資料：吉田（1938）

や仏像の顔が中心に据えられていた。ところが、五月九日以降の毎日新聞と大阪朝日新聞の両方に掲載された広告には、例えば「ハイキングを兼ねて」とか、もっと明確に図2右のように「初夏のハイキング」のように、以前の広告とは全く異なった図柄の広告が出されるようになるのだ。つまり、当初は宗教性を強調したものであったが、開催後一段落するとハイキングや行楽、さらに朱印収集の側面を強調し始めるのである。朱印収集は、本来は宗教的行為だが、この時代にはスタンプ収集が一つの娯楽として登場しており、朱印収集は娯楽的な側面を併せ持つようになった。そして、朱印収集だけが新聞の広告で強調されることは五月九日まで決してなかった。

真言宗機関誌『六大新報』に寄せられた体験記からは、五月下旬の平日にもかかわらず、相当数の人々が訪れ賑わっていたことが想像されるし、また出開帳に記された会場の様子は、金剛園の駅を出ると高島屋の出張店やら土産物飲食店が参道に軒を並べ、まるで門前町のにぎわいのようであった。この体験記の筆者は、次のようにも記している。

和尚自ら施餓鬼や蠟燭料の勧誘にはその勇氣に感心した。出開帳中施餓鬼の勤まるは此処だけですと絶叫するのはよいが、過ぎたるは及ばざるが如しで、縁日の大道商人式なのは余り感心した図ではない。(中略)
出開帳の総体的感じは余りよいものでなかった。素より辻堂式お粗末なものであるから無理はないが、札所と札所が余り接近してゐるためか競争的気分が横溢して焦り気味が多分に発散し、嫌な感じを起さ、れた所も二三ではなかつた(『六大新報』一七三三号一九三七年、七一八頁)。

出開帳を行った各札所寺院関係者が「施餓鬼」や「蠟燭料」の勧誘を熱

四国八十八ヶ所
出開帳
再喜び好機来すら
御申込は今すぐ
御申込所
御申込 - 四国八十八ヶ所出開帳準備委員会
御申込 - 四国八十八ヶ所出開帳準備委員会

大阪毎日新聞社
大阪毎日新聞社
大阪毎日新聞社

四国八十八ヶ所
出開帳
一日で巡れる
遠州園へ!
金剛園へ!
御申込所
御申込 - 四国八十八ヶ所出開帳準備委員会

大阪毎日新聞社
大阪毎日新聞社
大阪毎日新聞社

図2 四国八十八箇所出開帳の新聞広告

(左が1937年5月8日付、右が6月11日付。ともに「大阪毎日新聞」夕刊)

心に行い、おおよそ宗教的な行事からはかけ離れた様子が記されている。実際に、広告が朱印収集を宣伝材料としたように、参拝者の多くは朱印収集に高い関心を示した。こうした参拝者の要望に応えるために、寺院側には「軸物と経帷子のための納経所では天井からゴム紐を下げその先に把手を結びつけ捺印をして手を放すと上へ飛び上がるといふ仕掛けをしたところがあつた」ようである（「大阪毎日新聞」一九三七年五月六日付）、これにより押し寄せる参拝者に対応していた。もちろんこのような納経所の様相に対しては、「矢張り宝印はお坊さんから御本尊のお真言を唱へながら勿体らしく押し頂く処に有難味があり、又信仰の発露ともなり得るのである」（吉田 一九三八、九六頁）と、出開帳の宗教的意義を唱える人からは批判する語りも見られる。

ただし、総体的にはこの出開帳では、一九三七年五月六日付の大阪毎日新聞の見出しが語っているように、同時期に見られる徒歩による巡礼の宗教性を強調するのではなく、「楽なお遍路」が実状であり、「老人、婦人、子供達にとつて快適な『お遍路ハイキング』」（「大阪毎日新聞」一九三七年五月六日付）として捉える方が大方だったと思われる。

（2）声の多様性のために

そもそも出開帳というイベントそのものは南海電鉄という資本家の記念行事であったが、信仰そのものをも商品化しながら蠢く資本主義の権力によって演出されていった出開帳は、ほかのイベントとの示差的な商品でもあったのだ。出開帳開催に際して、御堂筋を練り歩きそれを見せる。新聞がそれを後援し、報道する。出開帳の最中には鉄道会社や映画配給会社などの資本によりさまざまな催しが繰り広げられ、あるいは寺院関係者においても財獲得のための諸実践が見られる。戦前における資本主義の隆盛と、

他方で第二次世界大戦へと向かう中で国家主義の台頭にあわせて、出開帳が生産されたといえる。この両者の圧倒的な力の前では、四国遍路という宗教現象は宗教的な文脈から切り離され、もはや人々は商品化されたつまりスペクタクル化した四国遍路と向き合わざるを得ないのであった。

しかし、本当にこの出開帳の中で人々は資本に操られるだけだったのだろうか？ドゥボールのスペクタクル論が、その実、このようなスペクタクルを転覆させるための「状況構築」のためにあつたとすれば、物象化された四国遍路において、権力に回収され得ない人々のフレキシブルな実践をすくい上げることが必要となるのである。

すでに述べたように、これについては、資料が限定されているため多くを論じることができないのが実状である。報告書に掲載された出開帳関係者の語りは、出開帳の宗教的な意義・国体護持に対する貢献度合いを喧伝するため脚色されたり、バイアスがかかっているということが想像できる。しかし、バフチン（一九九六）が示したように、書かれたもの、編まれたものが持つイデオロギーなり意味が完結し、それがテキストを支配しているのではなく、その中には多様な声（ポリフォニー）が内包されていると考えることもできるのではないだろうか。バフチンによると、テキストに隠された他者の声はあるときに表出し、テキストそのものをパロディー化するものである。あるいはアルチュセールら（一九九六）がマルクスの『資本論』の中に真空を発見しながら兆候的に読み解くことで、マルクスの時代的限定性を超克したような読み方もできるのではないだろうか。

実際、今回用いた出開帳誌は国家政策に沿うようなスローガンを掲げているにもかかわらず、現実的にはそれとは一見逆行すると思われる複数の資本側による演出の様相も示されていた。つまり、本稿が扱ってい

る『四国八十八ヶ所霊場出開帳誌』という編み物は、特定の方向にわれわれの認識を導くテキストなのだが、それはいくつかの方向に引き裂かれてもいるといえるのである。そして、このようなテキストの複雑性を認めるのであれば、宗教関係者によって描写された、宗教的な動機を持ち、スペクタクルの中でも宗教的実践を行う人々の姿もまた「真実」であると認めることもできるだろう。

以上の前提条件に立った上で、スペクタクル化された出開帳における人々の実践を拾い上げてみよう。例えば、出開帳誌の後半部には出開帳を終えた後の関係者の所感が収められており、当初出開帳に反対を唱えていた人物が、出開帳中に熱心に祈る参拝者を見てから出開帳を肯定的に捉えるようになった、あるいは別の人物は「参拝者は殆んど信仰の爲めの参拝者で、彼の蒐集趣味、スタンプ趣味若くは物見遊山の気分等による参拝者は殆んど無かつた。故に其の参拝者は概ね敬虔な態度であつて（中略）出開帳の趣旨に全く合致するものであつた」（吉田 一九三八、七〇―七二頁）と語っている。

また別に、参拝者の様子をより細かく伝える所感も収められている。例えば南海側が準備し集客を期待したと思われる電車を用いず、「南河内一円農家の尤も繁忙季であるに拘はらず、昼間の仕事に妨げぬ様、午前一時二時から起き出で多数農村人が殆んど各戸毎に巡拝され、電車も乗らず遠き路を徒歩にて金剛園に或は遠州園に巡拝された老媪達の団体が、毎日多数にありしは前代未聞の信仰結晶である」という語りが見られる（吉田 一九三八、八七頁）。

さらにかなりスペクタクル化された会場において、「七十歳位の老女を、二十五六と思はれる妙齡の娘さんが背中に負ひ、娘の母親らしい人は納経と老女の必需品を入れた袋を持ち、小さい男の子は藤椅子を持って、

奉安所毎に老女を椅子に下ろし納経を頂き、線香蠟燭を供へ老女の得心の行くまでお礼をさせ、家族一同合掌し、心静かに次の札所へ歩みを進む」姿も見られたとされる（吉田 一九三八、八三―八四頁）。

スペクタクル化された出開帳においても、自らの宗教的な文脈に引き寄せながら出開帳を実践する人びとがいたようである。こうした実践は抵抗としてではなくて、意味やイデオロギーをあふれ出してしまう人びとの分厚さ、あるいは時代の多様性・複雑性として捉えたい。

5. そして「四国霊場会」へ――おわりにかえて――

一九三七年に南海電鉄という鉄道資本が、大阪毎日新聞という出版資本主義の後ろ盾をえて行った「四国八十八ヶ所霊場出開帳」は、それはどのような社会的構成をおこなったのだろうか。

ここで注目したいのは、「香川新報」一九四二年十二月十日付にある「四国霊場会生る、普通寺本山で結成総会」という記事である。記事には本部を普通寺本山とし、各部会事務所は部会長がいる寺院へ置くことが記されている。またこの結成式には約四〇名が参加したとあり、すべての寺院がこれに関わっていたのではないようであるが、役員として香川県はいくつかの寺院住職と、徳島県と高知県の札所寺院住職が各一名、名を連ねている。そしてその徳島県の役員は、今回の出開帳でもっとも尽力した立江寺住職であることを指摘しておかねばなるまい。

一九四一年は、皇紀二六〇〇年の事業を終え、戦前日本における総力戦体制が極度に強化された時期である。したがって札所寺院をあげて日本の政府を支持するという姿勢を取ることが重要であったため、四国霊場会が結成されたのだといえることはできるだろう。しかし、それ以上に重要な

は、こうした組織結成のための関係性が、そのときに形成されていたことだ。それまで協同で事業を成し遂げたことがほとんどなかったと思われる八十八の札所寺院は、この出開帳というイベントを運行していく中で、おそらく初めて全札所寺院の意見調整と合意という経験をしていったのだ。

実は、後に長谷寺の毛主となる小林正盛と愛媛県松山市にある五十番札所繁多寺の住職丹生屋東岳が一九〇七年に巡礼を行った際の記録には、丹生屋が霊場連合会の趣意書の謄写版を作成していたことが記されている、その丹生屋自身が巡礼記の最後に、巡礼当時、札所寺院全部の連合組織は存在せず、これを結成することが宿願であったが、今回の巡礼中に住職たちと出会う中で、多くの賛同を得たと言っている（小林一九三二）。

現時点の筆者は、この会が実際に設立されたことをはっきりと示す史料を持ち合わせてはいない。ただ、一九二六年に行われた巡礼の記録に「四国霊場会」という語が登場し、しかも丹生屋東岳がその幹事であるという文章が、一行だけ存在する（富田一九二六）。小林と丹生屋が意図した霊場会の設立はどうかやら実現されたようで、一九三〇年ごろまで存続していたようではある（↓）。しかし、この霊場会が具体的な活動をしていた様子も残っておらず、また今回の出開帳においても霊場会の姿は見えなかったことを考えれば、この霊場会はほとんど機能していなかったように思われる。なお、東京では一九二九年に「遍路同行会」が結成されていた。

すでに機能不全に陥っていた四国遍路の統一組織が、一九四一年に今度は善通寺を中心として再び結成されたことと、はじめて意見調整を行い、成功を収めた出開帳の経験が無関係であるとは考えにくい。そこにはイベント化され創り出された出開帳、あるいはその空間の生産過程が、

逆に現実の社会組織を作っていくという社会—空間弁証法が見られると考えるほうが妥当である。

巡礼が重層的決定により絶えず社会的に構成されるという視点に立てば、巡礼空間は巡礼地の配置やルートによって容易にモデル化されるものでない。そこに巡礼者の活動を見出すのであれば、それを含めてどのように巡礼が社会的に構築されるのかという視点はやはり欠かすことができないはずである。

註

(一)「四国霊場には霊場会が組織されてゐると云ふから時折会合もなされるであらう」（「六大新報社」一六三号、一九三五、六頁）という記述がみられる。

参考文献

- 浅川泰宏「遍路道を外れた遍路—新しい巡礼空間モデルの構築に向けて—」『日本民俗学』二二六、二〇〇一年。
- アルチュセール、L.ほか（今村仁司訳）『資本論』を読む 上』筑摩書房、一九九六年。
- 小野芳朗『へ清潔』の近代—「衛生唱歌」から「抗菌グッズ」へ—』講談社、一九九七年。
- 片木篤・藤谷陽悦・角野幸博編『近代日本の郊外住宅地』鹿島出版会、二〇〇〇年。
- 北村行遠「江戸の信仰空間—出開帳寺社の開催場所の変遷をめぐって—」、『立正大学文学部論叢』九八、一九九三年。
- ギデンズ、A.（松尾 精文ほか訳）『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結』而立書房、一九九三年。
- 小林計一郎「近世善光寺の出開帳」『日本歴史』三七〇、一九七九年。

- 小林正盛『四国順禮』中央佛教社、一九三二年。
- 小林尚一『南海鉄道発達史』、南海鉄道株式会社、一九三八年。
- 白木利幸『巡礼・参拝用語辞典』朱鷺書房、一九九四年。
- 下村千秋「四国遍路礼賛」『旅』一四―三、一九三七年。
- 週刊朝日編『値段の明治・大正・昭和風俗史 上』朝日新聞社、一九八七年。
- 真野俊和『旅のなかの宗教』日本放送出版協会、一九八〇年。
- ソジャ、E. (加藤政洋・水内俊雄ほか訳)『ポストモダン地理学』青土社、二〇〇三年。
- ドゥボール、G. (木下 誠訳)『スペクタクルの社会』筑摩書房、二〇〇三年。
- 富田勝純『四国遍路』世相軒、一九二六年。
- 橋爪紳也『海洋都市―アーバンリゾートの近代―』白地社、一九九二年。
- バフチン、M. (伊東一郎訳)『小説の言葉』筑摩書房、一九九六年。
- 星野英紀『巡礼 聖と俗の現象学』講談社、一九八一年。
- 南海電気鉄道会社編・発行『南海電気鉄道百年史』一九八五年。
- 森 正人「遍路道にみる宗教的意味の現代性―道をめぐるふたつの主体の活動を中心に―」『人文地理』五三―二、二〇〇一年。
- 森 正人「近代における空間の編成と四国遍路の変容―両大戦間期を中心に―」『人文地理』五四―六、二〇〇二年。
- 八木康幸「町おこしと民俗学―民俗再帰的状况とフォークロリズム―」(御影史学研究会編『民俗の歴史的世界』岩田書院、一九九四年。)
- 山本成之「四国第三十番霊場土佐一宮百々山善楽寺の再興に就て」『土佐伝説』一六、一九三七年。
- 湯浅 隆「江戸における開帳場の構成―享和三年善光寺出開帳の事例を中心として―」『国立歴史民俗博物館研究報告』一一、一九八六年。
- 吉田卯之吉『四國八十八ヶ所霊場出開帳誌』四國八十八ヶ所霊場出開帳奉賛会、一九三八年。
- ルフェーブル、H. (齊藤日出治訳)『空間の生産』青木書店、二〇〇〇年。

Morinis, A. "Introduction: the territory of the anthropology of pilgrimage," in *Sacred Journeys the anthropology of pilgrimage*, ed. A. Morinis (Greenwood Press, 1992).